

フィヒテ初期知識学における空間論

中島 聰・村下 邦昭*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

*岡山理科大学非常勤講師

(2009年9月30日受付、2009年11月5日受理)

はじめに

フィヒテは前期知識学において、自我と非我との関係性を重視する。しかし、〈自我(有限我)の外〉という表現が幾度も使われているにもかかわらず、それは〈非我〉であるとされ、経験的に考えられる〈自我の外〉としての空間に関して、フィヒテは多くを述べない。

たとえば、初期知識学(1793年冬～1795年)において、まとまった空間論は『根源哲学についての我が省察』(1793～94:以下、『我が省察』と略す)と『実践哲学』(1794)、『知識学の特性綱要』(1795:以下、『綱要』と略す)に見られる。あとは、空間と何かしらの概念との関係を述べるものがほとんどであり、空間そのものの演繹はごくわずかである。しかも、上記3つの著作のうち、公刊されたものは『綱要』のみである。

とはいえ、『綱要』などにおいて示された空間論は、知識学が前期から中期へと移っていく時期に公刊された『人間の使命』(1800)や、後期の『意識の事実』(1810)にも引き継がれているという点で、注目に値する議論である。しかし、それにもかかわらず、殆ど看過されてきた問題である。そこで、本論はフィヒテの空間論の出発点である初期知識学における空間論を論じる。

1. 直観と構想力—空間論に関して—

空間はたとえば『実践哲学』において、次のように定義される。

「外的な直観の形式は空間である。つまり、空間において構想力は外に在る客観の経験的形式を構成する。しかし、構想力がこの仕事において、ある理想にしたがって構成するものとして自己自身を直観することによって、構想力は時間のうちで自己を直観する¹⁾」(PP II.3.211)

外的な直観の形式が空間である、という定義は、カント『純粋理性批判』における「空間は、外的な直観全ての根底に存在する必然的でアприオリな表象である²⁾」をフィヒテが引き継いだと言えるだろう。上記引用の2文目も、カントが、「空間は、ただ外的感官の現象全ての形式、即ち、その下でのみ我々にとって外的な直観が可能であるところの感性的主観的制約であるのみ以外の何ものでもない」と論じることに通じるだろう³⁾。このことについて、フィヒテは『綱要』では次のように論じている。「人は正当に、空間を形式、即ち、外的な直観の可能性の主観的制約と呼ぶ」(GEW I.3.204/I.405)。

フィヒテは確かに、カントにおける空間論を継承していると認めることができるだろうが、しかし、フィヒテはそれにカントとは異なる仕方では直観や構想力を結びつける。カントの場合、「我々は空間と時間の諸表象に関して外的及び内的感性的直観の形式を持つ⁴⁾」。そして、「感性的直観の多様なものを結合するものは構想力である⁵⁾」。

これに対して、フィヒテにおいては、直観と構想力は次のように関係しあうものである。「生産する能力は常に構想力である。それ故、直観されたものの……定立は、構想力によって生じ、そして、それ自体直観作用である」(GWL I.2.371/I.230)。

空間は構想力によって、「延長的で、連関的で[zusammenhängend]、無限に分割可能的」として定立された客観である(GEW I.3.200/I.400)。後に述べるように、自我の活動である構想力は無限に行われるのであるから、空間は有限ではなく、無限でなければならないだろう。そして、この構想力によって、有限我の経験的対象が空間中に定立される。しかし、それは実際に対象を定立するのではなく、非我の一部を表象の〈対象として〉定立するのである。

さて、ここで上記引用などで述べられている直観や構想力について触れておく必要があるだろう。既に指摘しておい

たように、フィヒテの直観・構想力の概念はカントと異なる。

これに関して、まず知識学の根幹を成す『全知識学の基礎』(1794～95:以下、『基礎』と略す)における直観と構想力の論述を概観しておく。

構想力は次のような能力として述べられている。「無限なものを有限なもの形式の内に取り入れようとする」とこと、「無限なものを有限なもの形式の外に再び定立する」とことの交代が構想力の能力である(I.2.359/I.215)。構想力はこのように無限と有限とを取り結ぶものであり、それ故に、両者の間を動揺する(cf. I.2.360/I.216)。構想力はこのように動揺するために、決して固定的な能力ではないので、無限な活動が可能なのである。

但し、自我はこのような構想力の活動を反省することによって構想力を限定する。構想力の限定によって、無限と有限とが明確に区分され、表象が可能となる。この構想力が限定されること、表象によって、「意識において捉えられ、確保される或るもの」となり、「一切の实在性が……単に構想力によってのみ産出される」のである(I.2.368/I.227)。ここにおいて、主観と客観は明確に区別され、限定されている。

このような自我の状態において、主観と客観とを総合したり、反立させたりする状態を「直観作用」[Anschauung]と名づける(I.2.367/I.225)。そしてさらに、この状態において働く能力を「生産的構想力」と呼ぶのである(ibid.)。生産的構想力なしには「人間精神において何もかも全く説明されえない——そして、この生産的構想力に人間精神の全メカニズムがすぐに基礎づけられるだろう」(I.2.353/I.203)。したがって、实在性を産出するという「かの構想力の活動に、我々の意識、我々の生、我々に対する我々の存在、即ち、自我としての我々の存在、これらの可能性が基礎づけられている」(I.2.369/I.227)。

さて、直観作用について、さらに補足しておく必要がある。

自我の能動性は無限であるが、障害である非我によってその活動を限定される。この障害において、自我の能動性は正反対の方向へと反射される(cf. I.2.369/I.228)。これらに関して、『基礎』の論述に従って、自我の能動性の起点を仮にAとし、障害の点を仮にCとする(cf. I.2.369/I.228)。AからCへの方向が能動性であり、CからAへの方向が受動性であるとみなされる(cf. I.2.370/I.228)。しかし、いずれの方向も同じ自我の中の活動である。この状態において、二つの反立しあう方向は同一の自我の中で総合されており、これが「構想力の能動性」である(ibid.)。また、それ故に、このような「自我の状態は直観作用である」(I.2.370/I.229)。したがって、「直観作用は、受動性なしには存在しない能動性であり、能動性なしには存在しない受動性である」(ibid.)。このような規定から明らかのように、「Cにおいて直観は限局されている」(ibid.)。自我がCを越えていかならば、直観は直観ではなくなる。直観はあくまで限局された自我の活動なのである。それ故、「自我は直観するべきである」(I.2.371/I.229)。

ところで、自我は自身に何もかもを帰属させない限り、自我には何も帰属しないのであるから、直観もまた自我に帰属しなければならない(cf. I.2.371/I.229)。それ故、「自我は直観するものとして自己を定立するべきである」(I.2.371/I.229)。それ故、直観作用は自我にとって、「自我の偶有性」である(GEW I.3.193/I.391)。

但し、この時、自我は直観作用に含まれる能動性と受動性の内、「能動的な側面のみ」を自我に帰属させ、自己自身と同一であるとしている⁶⁾。したがって、能動的である直観するものが自我である以上、これに反立される直観されたものは受動的であり、それ故、非我である(I.2.371/I.230)。この直観されたものは、自我が自己の外に或るものを作り出すという能力によって生産されるのである(ibid.)。そして、「生産する能力は常に構想力である。それ故、直観されたものかの定立は、構想力によって生じ、そして、それ自体直観作用である」(ibid.)。

したがって、自己に向かう直観と非我に向かう直観との二つの直観が考えられるが、前者は反省を介する直観作用であり、後者は単なる直観作用である(I.2.370f/I.230f)。言い換えるならば、前者は障害によって反射された自我の能動性であり、後者は自我の構想力という能動性である。特に、後者は自我の「絶対的自発性」に基づいている(I.2.371/I.231)。

さて、直観するものと直観されたものが区別されるためには、直観が浮動するものではなく、固定されたものでなければならない。つまり、直観するものと直観されたものとの領域が確定される必要があるのである。だが、「直観作用それ自体は決して固定されたものではなく、むしろ、抗争しあう方向の間における構想力の動揺である」(I.2.373/I.232)。それ故、固定されるものは「直観状態の産物」であり、直観するものと直観されたものである(ibid.)。

2. 空間の定立と、その空間の特徴

さて、空間に関しては、次のような論述もなされている。

「受容性を触発する質料による感覚可能性の関係[努力を持つための関係]。——それ故、空間における或る

もの。——したがって、必然的に存在しなければならない或る努力、この努力に空間、つまり、充滿した空間が必然的に属する。それ故、努力が空間を満たすということが、要請されるべきであったこと〔Q.E.P.〔*Quod erat postulandum*〕〕の偶性であるかもしれない限りにおいて。——今や、しかし、空間を満たす努力の偶性が存在するべきである。即ち、私は、努力する以外は、それを何も明らかにしうる必要もなければ、想定する必要もない。——ただ、自我が確かに、 $a=a$ であるべきであって、同じ空間内の瞬間 a 、 b 、 c などにおいてあるべきではない或るものを必然的に運動に関係づけられなければならないのみである」(PP II.3.248f)

空間の構成は理論的には自我の構想力や直観に依存し、実践的には努力に依存する。逆に、そのような構想力や努力が働く場がなければ、構成される空間も存在できないだろう。つまり、構想力や努力はある領域を空間として満たすという活動を行わなければならない。「構想力は、自己の表出の領域を持たなければ、自己を表出できない。その領域はそのような領域以外のものではない」(GEW I.3.200/I.400f)。とはいえ、物自体のように、表象されない領域が自我に対して存在するのではない。これは、あくまで理論的な問題であって、自我が非我によって限定されている、という前提の上で行われている話題である。したがって、実践的には、この逆が行われる。つまり、努力なしには客観なし、と論じられるように、努力することによって、自我に対して空間が存在するのである。努力は空間を満たすように努力するが、それは構想力によって表出されるだろう領域を満たす、ということである。したがって、努力は空間に対して、空間を構成せしめる活動であり、そのような活動として表わされる。そしてまた、「空間の純粹直観は……構想力によって……全く自由にではなく、むしろ必然的に産出され、したがって構成される」(ZV/L IV.3.34)。しかし、構想力によって産出された空間は「空虚な空間」として定立される(GEW I.3.202/I.402)。

ところで、初期知識学においては『綱要』が顕著であり、後の『人間の使命』に引き継がれるフィヒテの空間論の特徴は、空間が物によって満たされていない、ということである。

「構想力は、空間を満たしている物〔Ding〕から空間を切り離し〔*absondern*〕、空虚な空間を描く〔*entwerfen*〕」(GEW I.3.200/I.400)。

このような物は空間を満たすが、或る物と他の物との区別は上述のように空間によって行われなければならない。つまり、諸客観は例えば「Aと並んで〔*neben A*〕」というように「相対的」に存在する(GEW I.3.201f/I.402)。そして、このような関係性が実際の、空虚でない空間を構成する。

後の『人間の使命』では、具体的に次のように述べられている。

「物は並んで、上下に、前後に、私から近くや遠くに存在している〔*neben, über und unter, hinter und vor einander; mir näher, oder von mir entfernter*〕」(II.232)。

いわゆる空間の3次元性は自我を基本として成立しているのである。そして、空間内の物の位置関係が空間の3次元性を規定するのである。

それ故、自我が直観によって空間を定立する場合にも、諸対象を直観することによって、諸対象間の関係によって空間を構成するのである。したがって、物を排した純粹空間は構想力、言い換えれば想像力によってしか考えられないのである。このように論じると、フィヒテの空間論が非常に経験論的に思えてくるが、しかし、自我の実際的な活動を考えるとならば、有限我は既に自我によって定立された空間内に存在し、非我である物体と関係しているために、このような経験論的な論述は不可避とも言えるだろう。また、絶対我から非我を演繹できない以上、自我に対して必然的に非我としての物が存在する。

さて、空間中の、或る客観Xは他の客観Yによって限定されている。逆に客観Yも客観Xによって限定されている。但し、それは3次元方向という意味だけではない。客観Xを生じせしめる直観Xによって、客観Yを生じせしめる客観Yが限定され、その逆もありうるという自我の活動に関しても、限定作用の議論が及んでいるのである。客観Xが客観Yより先に直観されている場合、客観Xの中に客観Yが含まれるが、客観Yを自我が直観するならば、客観Xと客観Yとは区別される。つまり、「もし自我の直観としてXが定立されうべきならば、Yが定立されている点⁷⁾において、端的にY以外は定立されない」(GEW I.3.195/I.392)。第三項としてZが想定され、更に多くの客観が想定される場合でも、このXとYとの関係がそのまま適用される。つまり、Yは〈非X〉であるのだから、Zは〈非(X, Y)〉である。このようにして、諸客観によって空間は無限に分割されるのである。

ここで問題になるのは、XがYに(先行)しているということ、しかも、(空間的)に先行しているのではなく、(時間的)に先行している、ということである。つまり、「時系列」(Zeit-Reihe) (GEW I.3.206/I.409)が空間論に関係するのである。

3. 空間と時間の密接性

フィヒテの空間論の特徴として、空間と時間との密接性が挙げられる。

空間定立において働いた構想力が動揺することによって、つまり、限定・非限定相互に移行することによって、自我の内に時間が生じる。つまり、「単なる純粋理性〔純粋我〕に対して一切は同時である。ただ構想力に対してのみ時間が存在する」(I.2.360/I.217)。その時間に関して論じられるならば、構想力は次のような特徴を持つ。「構想力はこの動揺を……一瞬間以上保たない」(I.2.360f/I.217)。

時間論もまた、『基礎』では特に述べられずに、『我が省察』や『実践哲学』、『綱要』を中心に述べられている。『綱要』第4章は「直観は時間において限定され、直観されたものは空間において限定される」という見出しを持つ (GEW I.3.193/I.391)。この『綱要』第4章において、時間は次のように扱われている。

物は空間の中に「同時に」存在するが、物が知覚される場合には、「ただ順番に〔nach einander〕のみ、継時的系列〔successive Reihe〕において……時間の中で知覚される」(GEW I.3.207/I.409)。つまり、上述したように、客観Yに対して客観Xが先行し、客観Yは客観Xによって限定される、というのは、時系列において論じられるのである。

さて、(順番)ということに関して、過去と現在について次のように論じられる。「そもそも過去は、それが現在において考えられる限りということ以外では、我々にとって存在しない」(ibid.)。過去は物自体と同様に、そのようなものとして定立される限り存在し、さらには、我々が時間を定立しない限り、時間は流れない(ibid.)。しかし、「過去の制約の下にのみ現在がある」ために、「過去は我々にとって必然的である」(ibid.)。現在の制約下に意識の可能性があるが、意識の可能性において能動性が定立される(cf. GEW I.3.207/I.409f)。この定立が「現在の瞬間の性格」である(GEW I.3.207/I.410)。この現在の瞬間は、すでに定立されているもの以外は定立されないという性格を持つ「過去の瞬間」に制約される(GEW I.3.207f/I.410)。この二つの瞬間を同一の意識が持つが、この二つの瞬間があるからこそ、意識は同一なのである(cf. GEW I.3.208/I.410)。ただ一つの瞬間しかない場合には、意識が同一であるかどうかについて述べることはできない。

ここで客観Xと客観Yとの空間的關係が、(過去)と(現在)という時間的關係と平行関係にあるということに留意しなければならぬであろう。しかも、ただ平行関係にあるだけではない。

「空間の特定の量は常に同時的である。時間の量は常に順番的である。したがって、一方は他方によってのみ測ることができる。空間を通過するために使う時間によって空間を測る。我々、あるいは規則的に動きつづける或る物体(太陽、時計の針、振り子時計)が時間において通過することができる空間によって時間を測る」(GEW I.3.208/I.411)。

運動が時間と空間を相対的に関係づけるものであると考えることができるだろう⁸⁾。

さて、瞬間については、『実践哲学』に次のような論述がある。

「ある時間としてある瞬間を受け入れる為に、その瞬間を構想力は完全に制限しなければならない。つまり、各々の瞬間bは、しかし、先行する感覚-aと後続する-bによって制限される。この二つの-aは単にbに関する他の段階でありうる。つまり、そのことは事物が問題なのではない。各々の段階bは今や、それと同じものから区別された-aであり、量にしたがって区別された-bである。

感覚における差異なしに、いかなる瞬間も区別されないだろう。感覚の感じ取れる諸段階は、しかし、区別された瞬間である。それ故、かの限局は形式である。——時間はただ一つの次元のみを持つ。そして、全ての瞬間はただある形式のみを持つ。これが要点である。——形式は、それ故、限局であり、これはある仕方でのみ可能である」(PP II.3.216f)

〈瞬間〉が能動性の定立や構想力と結びついている点に、フィヒテの時間論の特性があるだろう。構想力や憧憬が一瞬間しか続かないのは、定立あるいは能動的活動が(一回ずつ)しか行われなからだろう。『基礎』において自我の活動が瞬間的である、ということだけが強調されているのは、このような(時間論)がフィヒテの考えの中にあつたからだろう。そして、そのような一瞬間が不断の活動によって、つまり構想力の動揺によって積み重ねられ、自我は継続的に活

動しているように思われる。

なお、『綱要』第4章の見出しの意味は、明確に述べられていないが、おそらく意識が時間に制約されている以上、直観も時間に限定され、空間が構想力によって生じる以上、空間は直観にも限定される、ということの意味していると思われる。

ところで、XとYというように〈異なること〉が時間的に把握されることによって、運動が生じるのである。「可変的な系列は運動の点でなければならない」(PP II.3.250)。それ故、空間における自我の実践的活動は常に時間の中にあると述べることができるだろう。

「直観する自我が非我=AあるいはBなどである限り……直観する自我は全く存在せず、むしろ、その自我が非我一般を、そして、この努力の客観を非我として直観する限り、直観する自我は存在するだろう。したがって、直観能力は空間においても、時間においても存在する。つまり、時間において直観された諸変容は、ここでは既に非我とみなされる」(PP II.3.228)

自我が空間を空間として構成することによって、空間は成立する。しかも、それは時間においてである。しかも、そこには(運動)という力学的な概念も含まれている。但し、フィヒテのこのような空間論・時間論は、ニュートンが『自然哲学の数学的諸原理』(通称『プリンキピア』)において示した絶対空間・絶対時間と異なる。

「絶対的な、真の、数学的な時間はそれ自体において、その本性において、外的な何ものにも関係せずに、均等に流れるものであり、別名持続である。相対的な、見かけ上の、日常的な時間は……運動による任意の持続の感覚的で外的な測度であり、真の時間の代わりに使われている……。

……絶対空間はその本性において……同じように、不動に常に存在している。相対的空間は……物体に対する位置に関して我々の感覚によって決定される」⁹⁾

先に引用したように、フィヒテは空間と時間の関係を振り子時計などの例を使って説明していたが、ニュートン的な立場から言えば、これは相対的な空間・時間と、あるいは日常的な(vulgaris)空間・時間と呼ばれうる。しかし、フィヒテの立場は、間違いなくそのような相対的な立場であり、しかも、その相対性を与えているのが、自我の活動なのである(10)。

4. 小括

フィヒテは『綱要』と次のような一節で締め括っている。

「『純粹理性批判』においてカントは、そこで時間、空間及び直観の多様性が与えられており、自我において、自我に対して既に現存しているところの反省点から始める。我々はこれらを今アプリアリに演繹し、そして、今やそれらは自我の内に現存している」(GEW I.3.208/I.411)

これに関して、木村素衛は次のように論じている。

「フィヒテのこの言葉は一応正当である。が併しそれは「感性論」に於けるカントに対してであることを我々はまた我々の側に於て充分注意して置かなければならないであろう。「分析論」に於ては……例えば彼は言っている。——時間と空間との先天的表象は、感性がその根源的受容性に於て提供するところの多様に対する覚知 Apprehension¹¹⁾の純粹総合に依てのみ「生産」erzeugen せられるのである」¹²⁾

とはいえ、木村はカントの空間・時間の演繹はフィヒテの方法論の「低次面的投影」と捉える¹³⁾。カントはカテゴリーや継起などによって空間・時間を演繹したが、フィヒテは自我と非我との関係性からそれらを演繹した。フィヒテの空間論にカテゴリーが表立って出てこないのは、カテゴリーに示される一切は自我によって、あるいは自我と非我との関係において規定されるため、自我と非我の関係を示せば、カントのようにカテゴリーを用いる必要が特別なからだろう¹⁴⁾。

『基礎』では、さらにこのようにも論じられている。

「カントは客観の観念性を時間と空間の前提された観念性から証明した。我々は逆に時間と空間の観念性を客観の証明された観念性から証明するだろう。カントは時間と空間を満たすために観念的な客観を必要とする。我々は観念的客観を定立しうるために、時間と空間を必要とする。したがって、我々の観念論は決して独断論的観念論ではなく、批判的観念論であり、カントの観念論よりも数歩先に進んでいる」(I.2.335Anm./I.186Anm.)

物を排した空虚な空間は純粋空間であるが、そのような空間は物が存在するために必要であった。そして、そのような空間は相対的な、日常的な空間であった。空間がそのような空間である理由は、空間があくまで自我の活動によって定立されるからである。そして、その定立は自我の実践的活動によって行われる。

自我の活動は〈障害〉Anstoß において阻まれる。この障害は非我に属し、この障害を無限の彼方へと押しやる活動が自我の〈努力〉Streben である。この努力は多分に経験的な活動である。それ故、努力の対象もまた往々にして経験的である。空間が日常的である理由もここにあるだろう。空間が日常的ではなく、ニュートンのな絶対空間である場合、それは知識学においては空虚な空間である純粋空間である。これは構想力によって定立されるが、構想力は理論的活動である。また、物の表象も理論的活動である。しかし、表象された物がいかなるものか、ということは理論的活動によっては決して規定されず、むしろ実践的活動によって規定される(cf. GEW I.3.201/I.401)。

フィヒテの空間論は理論と実践の上に、つまり、それらの総合によって成立している。フィヒテが知識学によって遂行したことはカントにおける理論と実践の総合(統一)であった。それにもかかわらず、知識学も当初は理論と実践に分けて記述されていた。しかし、理論的部門を論じた『綱要』において、理論と実践の総合が知識学において徐々に現れ始める。『綱要』を知識学の展開史という議論の俎上に置く場合、この点が留意される必要があると思われるが、空間論は理論と実践の総合に関する一議論として評価されても良いだろう。そしてまた、この『綱要』における空間論は、カントが空間論で使用した外的直観やカテゴリー、経験などと言った述語(概念)を利用せず、知識学の枠組みの中で考えられている点で、『綱要』に先立つ『実践哲学』と一線を画す。

初期知識学の空間論を取り扱うことは、知識学がカントの影響を大きく受けている立場から、フィヒテ独自の立場へと移行していく有り様を示すことになるだろう。そして、この移行を示した上で、改めて、空間論・時間論を含めたカントとフィヒテの哲学体系の異同点を明らかにする必要があるだろう。さらに、このことはまだほとんど研究が進んでいないフィヒテにおける自然哲学の解明に対しても重要な議論となるだろう(了)。

凡例

- ・ フィヒテのテキストについては *J.G.Fichte-Gesamtausgabe* を用い、主にこれより引用した(全集の系列はローマ数字で、巻次とページ数についてはアラビア数字で表記。例: I.2.400(アカデミー版全集第1系列第2巻400ページ)。引用に際しては、I.H.フィヒテ編集の全集 *J.G.Fichte's sämtliche Werke* を適宜参照した(巻次はローマ数字で、ページはアラビア数字で表記。例: I.280(I.H.フィヒテ版全集1巻280ページ))。
- ・ フィヒテの著作からの引用箇所は全て文中に記す。その他の著作・論文などからの引用についてはその都度、注を付す。
- ・ フィヒテの著作について、別記している略記号を用いる。但し、この略記号の内、『全知識学の基礎』の略記号GWLは、煩雑になるために、特別な場合を除いて、用いなかった。したがって、略記号のないフィヒテの著作からの引用は、全て『全知識学の基礎』からの引用を示している。
- ・ 強調に関しては、文献における各種の強調を、次のようにまとめた。外国語の原テキストにおける各種の強調は全て斜体にて表記した。日本語文献及び原テキストの日本語訳における強調は全て一重下線で表記した。筆者による強調は括弧くゝないしは二重下線にて行った。
- ・ 本文及び注における()は筆者による補足のために用いた括弧である。引用文における()は引用文献中にある括弧であり、[]は筆者が補足のために用いた括弧である。
- ・ カント『純粋理性批判』からの引用に関しては、慣例に従い、第1版をA版、第2版をB版として表記した。

略記号一覧——丸括弧内は邦題及び日本語の略記(略記が同じ場合は省略)

GEW = *Grundriss des Eigenthümlichen der Wissenschaftslehre.*, 1795. (『知識学の特異性綱要』、『綱要』)

GWL = *Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre.*, 1794-95. (『全知識学の基礎』、『基礎』)

PP = *Practische Philosophie.*, 1794. (『実践哲学』)

ZV/L = *Züricher Vorlesungen über den Begriff der Wissenschaftslehre(Nachschrift Lavater).*, 1794. (『知識学の概念についてのチューリッヒ講義(ラーフェーター手稿)』、『チューリッヒ講義L』)

参考文献

Fichte, J.G., *J.G.Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.*, hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Jacob, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1962ff. (ad 1970 hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Gliwitzky unter Mitwirkung verschiedener Autoren.)

---, *Johann Gottlieb Fichte's sämtliche Werke.*, 11 Bde., Hrsg. von I.H.Fichte, Bonn, 1834-35 und Berlin, 1845-46(reprint, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1971).

フィヒテ著 R.ラウト・加藤尚武・隈元忠敬・坂部恵・藤澤賢一郎 編集委員『フィヒテ全集』哲書房:1995年～

Kant, I., *Kant's gesammelte Schriften.*, hrsg. von Königlich Preußlichen Akademie der Wissenschaft, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1900ff.

カント著 坂部恵・有福孝岳・牧野英二 編集委員『カント全集』岩波書店:1999年～(刊行中)

木村素衛『独逸観念論の研究』弘文堂書房:1940年

Lauth, Reinhold, *Die tranzendente Naturlehre Fichtes nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre.*, Schriften zur Tranzendentalphilosophie. Bd.6, Felix Meiner, Hamburg, 1984.

Newton, Isaac, *Isaac Newton's Philosophiae naturalis principia mathematica.*, 2 vols., ed. by Alexanrde Koyré & I. Bernard Cohen, Harverd University Press, London, 1972.

ニュートン著 河辺六男訳『自然哲学の数学的諸原理』(『世界の名著』第26巻)中央公論社:1971年

ニュートン著 中野猿人訳『プリンシピア』講談社:1977年

Hoeltzel, Steven, *Fichte's Deduction of Repräsentation.*, in *New essays in Fichte's Foundation of the entire doctrine of scientific knowledge.*, pp.39-59, ed. by D. Breazeale and T. Rockmore, Humanity Books, New York, 2001.

犬竹正幸「純粹自然科学と經驗的自然科学の間—『自然科学の形而上学的原理』から『オプス・ポストウムム』へ—」, カント研究会編『現代カント研究 第4巻 自然哲学とその射程』pp.243-276 所収:晃洋書房:1993年

北岡崇「純粹直観の働きとは何か—カントの空間論に即して—」『相山女学園大学研究論集』第18号第2部 pp.117-137, 所収:相山女学園大学:1987年

Metz, Wilhelm, *Fichtes genethische Deduktion von Raum und Zeit in Differenz zu Kant.*, in *Fichte-Studien.* Bd.6., S.71-94, Rodopi, Amsterdam & Atranta, 1994.

註

1) 時間については後述する。

2) Kant, *Kritik der reinen Vernunft.*, A24/B38.

3) Kant, a.a.O., A26/B42

4) Kant, a.a.O., B160.

5) Kant, a.a.O., B164

6) Hoeltzel, *Fichte's Deduction of Repräsentation.*, p.46.

7) ここでの「点」(Punct)は、「自我の作用性と非我の作用性とが第三者において偶然的に遭遇[会通]する(ohngefähr Zusammentreffen)」と述べられる(GEW I.3.193/I.391)場合における(第三者)である。

8) 運動に関して、ここで論究する余裕が無いため、簡単に補足しておく。

「自ら運動している物体は時間のうちで持続している。物体は空間のうちでは、しかし可変的なものであり(**)、逆に、時間においては可変的に運動するものである。というのは、物体は空間において持続し、同じ限局を保持するからである。……

しかし、このことは、ここでは実体であり、偶然性であり、そして、可能な相互の関係である。運動する物体は、ある確かな空間の偶然性である。この空間はまた、物体にとって偶然性である。——物体が運動する限り。というのは、ただ運動によってのみ、物体は流動的だからである」(II.3.243)

「(**)運動[Bewegung]の概念」(II.3.243 Anm.)

9) Newton, *Isaac Newton's Philosophiae naturalis principia mathematica.*, p.46(definitio VIII scholium).

10) ニュートンの力学体系を知識学の実践的部門に引き寄せて論じている箇所がある。

「物体の遠心的な力[*die vis centrifuga der Körper*]、場所を決定する力[*die vis loco motiva*]が生じ、それが全て人間精神の努力の体系に完全に相応しいところのニュートンの魅力ある学が生じる。

注意せよ。全く十分に留意すること。ここでは、外的な原因による運動の話題では全くなく、むしろ、諸物体の内的な運動衝動が話題である。前者は後者なしには考えられない」(PP II.3.250f)

特に後段の論述には注意しなければならない。ニュートンの力学体系では外的な力が問題であるが、フィヒテは物体の内部に存在する運動の原因を問題としている。物体内部に潜在する力という考え方は、ケプラーやニュートン以前の力学的な説明の方法の一つである。たとえば、物体が投げられた場合、その飛ぶ力はインペトゥスという物体内部に宿る力が問題であったし、物体の運動そのものに関しては、たとえば、コナトゥス(*conatus*)という概念が一時期利用された(cf. ニュートン『プリンキピア』定義V、ホッブス『物体について』(De corpore) 第15章「本性、性質について、及び運動とコナトゥスの様々な考察について」)。

11) 覚知(統覚)が、知識学においてどのような意味を持つのかは、十分な議論がない。ただ、付言しておくならば、統覚(純粹統覚: 根源的統覚)が「我思う」に結び付けられる(Kant, a.a.O., B131f.)のに対し、知識学において、そのような「我思う」は、「存在の特別な限定」に過ぎない(I.2.262/I.100)。

12) 木村素衛『独逸観念論の研究』p.467(旧漢字・旧仮名遣いは新書体に変更した)。

13) 木村、上掲書 p.468。

14) カントのカテゴリーをフィヒテが無視したのではなく、それをフィヒテが消化した結果である。フィヒテは『実践哲学』において(動力学的)、(数学的)という語を多用している。また、初期知識学において重要な(作用性)もカントのカテゴリーから得たものと考えられる。しかし、カントのカテゴリーと知識学の関係は殆ど議論されることない問題である。

なお、『綱要』において、次のように論じられている。

「カントはカテゴリーを思惟形式として根源的に生じさせており、それに関して彼の観点からは正当である。カントは客観へのカテゴリーの適用を可能にするために、構想力によって企図された図式を必要とする。……知識学においてカテゴリーは客観と共に同時に生じ、客観を初めて可能にするために、構想力自体の基盤の上で生じる」(GEW I.3.189/I.387)

Fichtes Raum-Theorie im frühen Wissenschaftslehre

Satoshi NAKASHIMA and Kuniaki MURASHITA*

*Department of Socio-Information, Faculty of Infomatics,
Okayama University of Science*

** Okayama University of Science, Docent
1-1 Ridaicho, kita-ku, Okayama, 700-0005, Japan*

(Received September 30, 2009; accepted November 5, 2009)

Im frühen Wissenschaftslehre soll Fichte die Beziehung zwischen Ich und Nicht-Ich betonen. Der Ausdruck, 'außerhalb Ich (endliche Ich)', verwendet immer wieder das 'Nicht-Ich', d. h. empirisch denkbar 'außerhalb des Ich' als ein Raum, jedoch ist Fichte selten Erwähnung.

Während Fichte den Kants Raum-Theorie übernehmen, sagt die Theorie, dass wir den Raum besitzen. Unter ihnen, erwähnte die nahe Beziehung zwischen dem Raum und Zeit. Und der Raum-Begriff oder Begriff von Dingen ist, was getan wird eine Folge. Daher ist die Beziehung zwischen dem Raum und Zeit relativ. Außerdem, durch den Sinn der Raum-Zeit ändert es sich. Das ist Newton bestritte alltäglicher Raum und Zeit. Das Argument von Fichte ist die Annahme, dass die Welt immer empirisch getan wird. Fichte besprache es, dass der Raum und Zeit in der natürlichen auf diesen Punkt beruhenden Philosophie überblickt worden sollte.